

盛夏後に至つて多量に施用した(多量とは斯る有機物分解の鈍い土壤の分解力を超過した量の意味であつて絶対数量の多少を意味しない)有機物の分解が漸く旺んとなり不足なりし窒素が一時に多量に供給されるため一時的に窒素を吸收し過ぎて窒素多施に似た稻の生育をなし軟弱に育つ一方根の方は依然として分解する際に多量に生ずる瓦斯によつて根を害されてゐることになる、従つて軟弱な葉の上に衰弱し障害されつゝある根の影響も受けて極めて稻熱病に冒され易い状態にあるのであるから斯う云つた土壤に於ても未熟または新鮮有機物の施用の度を過すと常に稻熱病に冒され勝ちとなるのは必然である(問相馬郡飯曾村の如き山間地で苗代のユリミ、ズ駆除に石灰窒素を使用すると必ず苗の生育不良となるは如何なる理由なりや、(答)苗代ユリミ、ズの駆除として石灰窒素を使用すること失敗する原因是二つある、その一つは用量を誤ることである、即ちユリミ、ズ駆除を行ひ且つ苗代肥料としても利用し得るためには坪當りの撒布量は坪當り石灰窒素重量四十匁程度とすべきであつて、若しそれ以上過重に施用したならば苗代肥料として窒素過度となつて健苗の育成は望み得ないことが勿論である、その二は飯曾村の如き海拔五〇

堆肥講習問答 冰解集(六)

農試本場 内山生